



# 医学部だより

第33号

2016.10.1



## 学問の府でありつづけるために

医学部長 苛原 稔

本年4月に始まった国立大学法人の中期計画第3期は大学淘汰の時代であると認識すべきである。すでに私立大学のいくつかは経営に行き詰まり、閉学を余儀なくされている。少子化で18歳人口が減ってきたわけであるから、早晩入学定員を満たさない大学が退場に追い込まれるのは自明の理である。これからは受験生に選ばれる大学でなければならないわけで、国立大学であろうと人気が無ければその憂き目にある可能性は十分にある。加えて、運営費交付金が減少する中でどの大学も厳しい経営環境にある。

私が医学部長を拝命して4年目になるが、今日ほど大学の生き残りのために何をすべきかを考える日々はない。その中で思うことは、危機感を感じて矢継ぎ早に対応することも必要であるが、ここはしっかり我が身を冷静に見て、身の丈にあった改革を進めることが最も重要な観点ではないかと思う。アイデンティティを失った大学には全く魅力がなく、受験生にそっぽを向かれるだろう。

そこで、この4年間の経験から、私なりに徳島大学医学部を構成する医学科、医科栄養学科、保健学科それぞれの身の丈を考えてみたい。

まず、医学科の課題は、1) 国際認証申請を契機にした医師養成カリキュラムのユニークかつ抜本的改変、2) 教育力と研究力のアップのために血を流す組織改革を進めること、3) 流動性の高い人材採用、であろう。医学部のエンジンとして、その浮沈はすべてに関わる。

医科栄養学科の課題は、何といたっても他の栄養士養成大学との差別化を明確にすることに尽きる。医学部にあり研究力に優れた栄養学科として国内外に認められているが、多くの栄養士養成大学の登場とともに特徴が薄れている。医科栄養学科に名

称変更した意味を踏まえて、他に追従できない特徴ある栄養学科として再び輝きを持ってほしい。

保健学科の課題も、急速に増加する医療系学部の中で、如何に特徴を持った保健学科になれるか否かである。そのためには、1) 教育と研究にメリハリのある人材登用、2) 各専門領域の学士教育と医療現場教育の融合、3) 研究マインドの醸成、であろう。是非、高度な医療を支える研究力のある一流の医療人材を供給し、日本全国に名を轟かせてほしい。

そして、医学部共通の課題としては、徳島大学医学部の3学科の特徴を生かした迅速なグローバル化、そして、見落としがちだが、事務部門の充実とインフラ整備である。特に、事務部門の整備は必要度の高い課題と思っている。

大学希望者全入時代において、政府の大学に対する要求は即戦力志向である。それもある面では致し方ないことであるが、忘れてならないのは、大学の大学たる所以は知の蓄積であり、将来に繋がる自由な発想や方法で教育や研究が行われる場所であり続けることである。これは、過去も現在も将来も多分変わらない大学の学問の府としての責務である。学問を行う場所であり続け、学生たちに基本的な考える力と変革に挑戦する気概を持たせる必要がある。それが大学の魅力になり、選ばれる大学になるのではなからうか。

そのためには、冷静に現実を見つめ、明確な方針を立てて、作戦を練る必要があり、集中と選択に基づいた管理運営が期待される。そして最も大事なことは、徳島大学医学部が学問の府であり続けるために何をなすべきかを教員、職員、学生のすべてが考えることであり、そのような意識を醸成することであろう。

私は、徳島大学医学部には底力があると信じている。

### 目次

### CONTENTS

巻頭言	1	教務委員会から	9
海外留学体験記	2	徳島医学会報告	10
医学部行事予定	3	受賞者紹介	10
モンゴル国立医科大学との交流 ーその新たなステップー	4	平成28年度臨床実習後OSCE成績優秀者	11
南海トラフ4連動地震に向けた徳島大学における 災害医療の取り組みについて	6	白衣授与・Student Doctor認定証授与式	11
オープンキャンパス	7	学遊抄	12
医学教育分野別認証評価の概要について	8	数字で見る医学部	13
学生委員会から	9	新任教職員あいさつ	14
		第68回西日本医科学生総合体育大会	14
		編集後記	14

## 海外留学体験記

# テキサス大学 サマー・リサーチ・プログラム 報告

医学科4年 齋藤尚子

この夏6月下旬から約2か月間、The University of Texas Health Science Center at Houston での Summer Research Program に参加させていただきました。Department of Anesthesiology の Dr. Doursout の研究室で、神経変性疾患モデルラットでの LPS 長期投与により、各臓器・脳の各部位でどのような変化が見られるかを調べました。研究室はフランス、中国、アメリカなどにルーツをもつ国際色豊かな研究者が在籍されており、また、現地校の学生の出入りも盛んで、ラボミーティングや、基礎・臨床合同のデパートメントのミーティングも活発に行われており、非常に刺激的な雰囲気の中で充実した生活を送ることができました。加えて、隣接する教育病院で医師の先生をシャドウする機会にも恵まれ、ベテランの先生が手掛ける様々な手術の見学や、レジデントの先生の生活の一部を体験させていただくことができました。また、休みの日には諸先生方のご自宅に招いてくださったり、新しくできた友達と遊びに行ったり、現地の日本人の方がご厚意でアメリカならではの体験に誘ってくださったりと、全てが素晴らしい夢のような時間でした。

今回、新しい場所で真っ新な状態から多くの方と出会い、様々なことを見聞きしたことは、自分の将来を客観的に見つめ直すきっかけになりました。また、基礎や臨床の細かい点について、日本と比較してどうか・何が違うかといった話題は、時としてもっと勉強しようというモチベーションにもなりました。



最後になりましたが、このような大変貴重な機会を与えてくださいました苛原医学部長、赤池教授、勢井教授、村澤医学部国際コーディネーターをはじめ、お世話になった全ての方々に厚く御礼申し上げます。

医学科4年 大道如毅

Dr. Wenzel のもとで、MSC という幹細胞を使って実験をさせていただきました。幹細胞としての多様な分化能のほうではなく、生体力学的な刺激で TNF- $\alpha$  の抑制など炎症性を発揮することについての探究です。

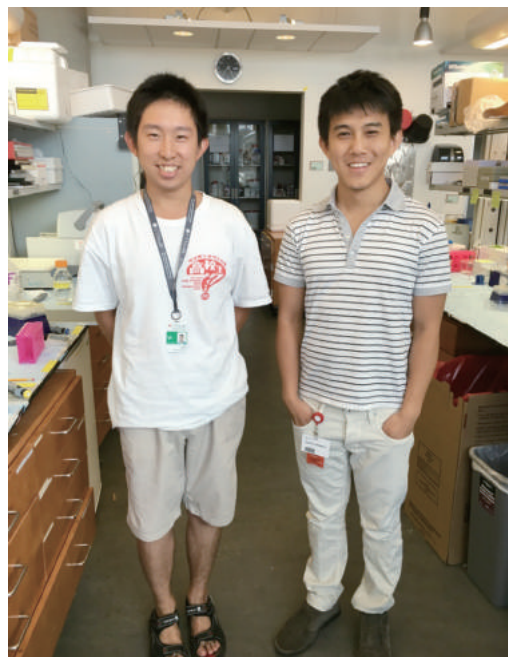
プログラムにアメリカの学生は 120 人いたようですが、驚いたことに外国からは日本の 2 人、上海の 6 人だけでした。村澤医学部国際コーディネーター、岡久先生をはじめ、過去にヒューストンに渡ったぼくの知らない多くの研究者、故能勢先生らのコネクションのおかげでいま自分は世界有数の研究施設群にいるのだと、こちらで知りました。

最終週、ぼくから先生をご飯にお誘いしました。「Ph.D. を取得するには?」、「仮にアメリカで働くには?」、などお酒と薔薇の力も借りて質問し、親切にご自身の経歴や日常も含めてアメリカの実情と、「将来どうするんだい?」みたいなことを語りつくしました。

最終日とか前日は、みんな行っていなかったようですが、「Rui? What time can you start RT-PCR?」と、飛行機の数時間前、19 時までかかって Excel 処理後、理想的なグラフができました。実験が大好きだからっていうのもありますが、そうやってなんの特別扱いもされなかったことが満足でした。君の将来に何らかの役に立つだろう、と嬉しいことに、自分の名前を論文に加えていただいたうえ、「I'll be very disappointed if

you don't give me any criticism.」と、いまも原稿の批評をメールでやり取りしています。

オープンラボだったおかげで IMM の 6 階のアメリカの学生らとはいつも一緒に授業に出て、同じ研究室の学生もいい人で友達の友達つながりで多くの人と外出しました。今回出会ったすべての人との関係を大切にしたいです。



# ハノーバー医科大学 交換留学プログラム 報告

医学科5年 古川 航多

この春、短期交換留学プログラムを利用して、ドイツのハノーバー医科大学で学外臨床実習に参加させていただきました。神経内科の一般病棟を3週間、針筋電図検査や脳波の検査を行う神経生理検査部を1週間の計4週間、見学させていただきました。病棟では多発性硬化症やパーキンソン病などの神経変性疾患を中心に、多くの症例を経験することができました。英語(とほんの少しのドイツ語)で患者さんを問診・身体診察したときは、初めての経験にとっても緊張しました。現地に滞在してみて最も驚いたのは、人種の多様さです。今や5人に1人が移民的な背景をもつといわれるドイツですが、患者さんの人種も多種多様です。なかにはドイツ語があまり話せない患者さんもあり、ときに家族が間に入り、またあるときは同じ移民を背景に持つ医療スタッフが間に入り円滑なコミュニケーションを図っていました。また街を歩いてみても様々な国のレストランが立ち並び、多文化主義を肌で感じました。

滞在中はドイツの学生だけでなく、同じ寮に住むEU圏内からきた様々な国の医学生と交流しました。夜な夜な自国の酒を持ち寄り、医療制度や文化の違いについて寮のメンバーと語り



明かしました。今回の留学で知り合った友人や、日本を客観的に見た経験はかけがいのない宝物です。このような素晴らしい経験をする機会を与えてくださった諸先生方、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



## 医学部行事予定 (平成28年10月～平成29年3月)

平成28年

- 10月1日(土) 後期授業開始
- 10月12日(水) 解剖体慰霊祭
- 10月29日(土)～10月30日(日) 大学祭
- 11月1日(火) 第111回医師国家試験願書受付 (11月30日(木)まで)  
試験日：2月11日(土)～2月13日(月)
- 11月2日(水) 徳島大学開学記念日
- 11月18日(金) 第100回助産師国家試験願書受付 (12月9日(金)まで)  
試験日：2月16日(土)
- 第103回保健師国家試験願書受付 (12月9日(金)まで)  
試験日：2月17日(日)
- 第106回看護師国家試験願書受付 (12月9日(金)まで)  
試験日：2月19日(日)
- 12月15日(木) 第69回診療放射線技師国家試験願書受付 (1月5日(木)まで)  
試験日：2月23日(水)
- 第63回臨床検査技師国家試験願書受付 (1月5日(木)まで)  
試験日：2月22日(水)
- 12月25日(日)～1月7日(土) 冬季休業

平成29年

- 1月6日(金) 第31回管理栄養士国家試験願書受付  
(1月13日(金)まで)  
試験日：3月19日(日)
- 1月14日(土)～15日(日) 大学入試センター試験
- 2月5日(日) 入学試験(推薦Ⅱ)
- 2月25日(土)～2月26日(日)  
入学試験(前期日程)
- 3月12日(日) 入学試験(後期日程)
- 3月17日(金) 医師国家試験合格発表
- 3月23日(木) 卒業式・大学院修了式
- 3月25日(土)～3月31日(金)  
学年末休業
- 3月27日(月) 助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表
- 3月29日(水) 診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験合格発表
- 5月9日(火) 管理栄養士国家試験合格発表



# モンゴル国立医科大学との交流 —その新たなステップ—

医学部長補佐(組織運営担当)

統合生理学分野 教授 勢井 宏 義

オリンピックの興奮が残る8月24日、医学科学生5名を含む徳島大学医学部モンゴル訪問団はウランバートル郊外のチンギスハン空港に降り立った。夏時間で日本と時差のないモンゴルは、日の暮れるのが遅く、訪問団は突き刺すような西日とひんやりと乾燥した大草原の空気に包まれた。筆者は2010年に次いで2度目の訪問となる。前回は、空港から市街地までの舗装されていないでこぼこの道路や、土煙をもうもうと立てながら我々を乗せて走るバスに、ある意味感動したが、今回、空港や道路はきれいに整備され、モンゴルは大きく変貌を遂げていた。

モンゴル国立医科大学(旧モンゴル健康科学大学)と徳島大学医学部との学部間交流協定は2005年に締結され、2006年から学生交流(相互訪問・サマーセミナー・ホームステイなど)が開始された。以降10年あまり、活発な交流が継続されている。多くのモンゴルからの留学生が徳島大学で学位を取得し、2012年には、モンゴルで同窓会も結成された。今回の滞在でも同窓会のメンバーには、送迎から観光まで大変お世話になった。モンゴル国立医科大学は国内唯一の国立の医師養成機関であり、国内のほぼ9割の医師がこの大学の卒業生である。今回、訪問団のうち教職員にとっての目的は、モンゴル国立医科大学に附属教育病院を建設するという大きなプロジェクトに向けてのミーティングがメインであった。苛原医学部長、永廣病院長、島田医学部長・病院長補佐、西野名誉教授、秋山蔵本事務部長(医歯薬学)、大城病院事務部長、鈴木病院看護部副部長、村澤医学部国際コーディネーター、そして筆者が参加した。

モンゴルには大学に附属した“教育病院”の仕組み・規則が無い。そこで、国際標準の医療を目指すモンゴルに、JICAが無償で150床程度の教育病院を建設することになり、すでに工事は始まっている(写真1:日本とモンゴルの国旗を掲げた工事現場)。徳島大学は「日本の医療」の実践を目指すモンゴル国立医科大学をサポートしていきたいと考えている。そのため、病院の管理運営にも日本式を取り入れたいとするモンゴル側の意向から、今回、初めて事務職員も参加することになった。モンゴル側からは、新学期のオリエンテーションで忙しい中、学長をはじめ研究部長、医学部長、病院長など一同が出席し、このプロジェクトへの強い意気込みが感じられた。現在、医科大

学が経営するのは25床足らずの小さな病院であり、その設備の乏しさに加え、医療保険制度や雇用・勤務体制も全く異なる中、「日本式医療」の実践には数々の壁が予想された。しかし、とてもやりがいのある仕事であり、徳島大学の一教員として誇りを感じる。このプロジェクトが成功することを強く願っている。

一方、学生はこれまで通り、モンゴル医学生の家ホームステイし、プレゼンテーションやパフォーマンスなど交流を行った。参加者(ホスト学生)は、医学科3年生の岩井君(Bilguun君)と木村さん(Nyamsaikhanさん)、2年生の玉山さん(Namuunさん)、小林さん(Gereleeさん)、高橋さん(Egelmaralさん)であった。2日目、教職員は会議のため同席できなかったが、徳島や徳島大学の紹介などを英語で行った後、パフォーマンスとして阿波踊りを披露したようである。モンゴルの学長が「ホストにはトップ5の学生を選んでいきます」と明言するように、ホスト学生は英語だけで授業を受けるコースの学生であった。最終日の観光に同行してもらった際、こちらからの質問にもてきばきと返答し、素直でまじめな学生であった。日本や日本語にも興味があり、明治維新の日本人がそうであったように、海外の先進的な環境を目指す意識が高い学生だと感じた。振り返って、徳島大学の学生はどうか・・・、“次はどこへ連れて行ってくれるんですか?” “NOプランですか?” “馬に乗りたあい”などと言っているうちに、モンゴルに追いつき追い越される時が来るかも、と、少し心配な気持ちになったが、モンゴル学生からの評価は高かった。(写真2:前列中央にモンゴル国立医科大学学長を中心に参加者全員が会議室に集まる)

学生、教員、職員、大学、政府・・・、様々なレベルでの交流によって、様々なレベルにおいて、お互いの違いを感じ、きちんと認識し、そして、違いを超えて理解し合い、共に前進する。筆者は、大きな国際貢献のチャンスに立ち会える喜びを感じつつ、複雑で多様な、そして時として理不尽な問題を抱える現代世界において、若い医学生たちに明るい未来を期待したい。モンゴルの突き抜ける青い空の下、大草原に立ちゆったりとした本来の時間の流れを感じれば、人間という存在は自分が思っているほど悲観的なものではないのかもしれない、という想いに包まれるのである。



写真1



写真2

医学科3年 岩井 恵 太

この度、8月24日から4泊5日でモンゴル・サマーセミナーに参加させていただきました。行きの飛行機は到着が20時頃でしたが、モンゴルはまだ明るく夕日に照らされるステップ高原がとても印象的でした。広々とした地形を反映したかのように、モンゴル国立医科大学の学生はとても親切にしてくださり、モンゴルの生活を堪能できました。このセミナーを通してできたモンゴルの学生との繋がりをこれからも大切に、お互い医師として再会できることを楽しみにしています。



医学科3年 木村 蘭 子

「アムレノー」。伝統衣装を身につけ、二人で向き合い、目の人の腕が上になるようにお互いの腕を前に差し出して重ねる。そして「アムレノー」と言いながら頬と頬でKissする。これはモンゴルのNew Year Festival で使われる伝統的な挨拶です。サハナの家に着いて最初にこの挨拶を覚えてもらいました。5日間という短い期間で医療人としての互いの将来について語り合い、友となり、再会を約束しました。モンゴルで得たものはたった数行では書き表せないものばかりです。このような素晴らしいセミナーに参加できたことを誇りに思います。



医学科2年 玉 山 美 都

私は将来国際的に活躍したく、海外で同じ医師を志す人達から刺激を受けたいと思い今回のサマーセミナーに参加しました。モンゴルでの滞在は、医学科5年生のナミという生徒の家でのホームステイでした。日本とは違った文化や大自然に驚き、感動させられる5日間でした。モンゴルの学生は英語が堪能で、自信があり、私の医学や英語などに対する姿勢を考えさせられました。将来、今回友達になったモンゴルの学生に負けないような医師になりたいと思います。



医学科2年 高 橋 里 鶴

モンゴルと聞いて思い浮かぶのは、大草原とゲル、そして馬、羊というような風景ではないでしょうか。郊外はその通りですが、首都ウランバートルは一転、大都会でした。写真はウランバートルの中央広場からの景色です。ここ10年ほどで急速に発展したそうですが、他国に頼る食料・医療状況やマンホール・チルドレン問題など、街の発展に追いつけていない部分もあり、少しでも解決に近づくように願っています。



医学科2年 小 林 陽 花

私は、モンゴルの病院を見学させていただき、お話を聞くに当たって、日本とモンゴルの医療機関の格差に衝撃を受けました。また、日本のような設備が整っていない中でも、情熱を持って学んでいる学生達を見て、刺激を受けました。モンゴルでの経験を経て、今まで先進国の進んだ医療に憧れを抱いていたのが、このような発展途上国の医療の進歩に携わるということにも興味を持つようになりました。このような経験をさせていただき、このプログラムをサポートくださった皆様に心より感謝しています。また、是非もっと多くの人達にこのプログラムに参加して欲しいです。



# 南海トラフ4連動地震に向けた 徳島大学における災害医療の取り組みについて

法医学分野 教授  
徳島大学環境防災研究センター 副センター長 西村 明 儒

南海トラフを震源とする東海、東南海、南海地震は、歴史的に70年から150年周期で発生し、太平洋沿岸に多大な津波被害を及ぼしてきました。また、これらと連動して、関東大震災に代表される関東直下地震が発生していることから、1995年に発生した阪神・淡路大震災以降、内閣府は、「東海地震発生後、応急対応中の数時間後に南海地震が発生し、数日遅れて関東地震が発生する」という最悪のシナリオを想定し、防災対策を行ってまいりました。しかしながら、2011年3月11日に発生した東日本大震災が、プレート境界の3連動地震と、これまでの想定を遥かに上回る事態であったことを受けて、南海トラフ3地震と日向灘地震が相次いで発生する4連動地震を最悪のシナリオとする対策が始められております。

徳島県は歴史的に南海地震の津波被害を受けた経験があり、南海地震単独に対する対策は講じられていますが、4連動地震では津波被害が広範囲になるのみならず、北部にある徳島市内でも震度7の地震動が予測され、最悪の場合、本四架橋がすべて破壊され、空港も港も使用不能となり、外部からの応援が期待できず孤立する可能性が危惧されます。その様な場合、神奈川県から和歌山県にかけての太平洋沿岸も多大な被害を被っている状況が容易に想起され、災害医療は、外からの応援なしで、地元の限られた人的・物的医療資源で対応しなければなりません。

傷病者の救護・治療については、徳島大学病院救急集中治療部、徳島県立中央病院ならびに徳島赤十字病院を中心とした災害派遣医療チーム(DMAT: Disaster Medical Assistance Team)が、発災直後から活動することになります。熊本地震の際も、徳島大学は徳島県の要請を受けて、いち早く現地にDMATを派遣しました。一方で、死者については、日本法医学会、警察、各地の医師会、歯科医師会がそれぞれ対策を講じていますが、実際の活動には各機関の連携が不可欠となります。米国では、DMATの特殊チームとして、医師、看護師、検視官、法医学者、歯科医などからなる「災害死亡者家族支援チーム(DMORT: Disaster Mortuary Operational Response Team)」が災害現場や死体安置所に急行し、遺体の識別や修復、遺族への連絡とこころのケア、検視検案を行っております。わが国においても、多数の死傷者を生じる災害(大事故)における遺族・遺体に関わる様々な問題についての検討が必要とされたことから、2006年秋に「日本DMORT研究会」が発足し、災害現場で家族(遺族)支援を行う派遣チーム(現場DMORT)の組織作りが行われています。

このような災害時の死体検案と遺族のケアを徳島県でも充実させようと、2011年に徳島大学環境防災研究センターの「四国防災・危機管理特別プログラム共同開設による専門家の養成」事業の一環として、徳島県遺体対応・遺族支援研究会(2014

年に「徳島県災害時対応研究会」と改称)を立ち上げ、活動を開始しております。徳島県では、1985年の日航機墜落事故を受け、警察、医師会、歯科医師会、徳島大学の幹部同士による連絡協議会を毎年開催し、情報共有していますが、本会は、医師、歯科医師、薬剤師、看護師、助産師、保健師、臨床検査技師、診療放射線技師、管理栄養士、臨床心理士などの医療関係者のみならず、警察官、海上保安官、消防隊員、自衛隊員など、災害時に実動部隊となる人たち同士の顔の見える関係を構築するのが主な目的です。毎年、研修会と警察、医師会、歯科医師会合同での死体検案訓練を行っております。これに呼応して、徳島県医師会では、筆者監修で「死亡診断書(死体検案書)作成マニュアル(DVD・Blue-ray)」を作成して、全会員に配布するとともに、講習会を開催し、死体検案のスキルアップを図り、南海地震を迎え撃つ準備をしております。



警察による検視・見分



医師による死体検案



歯科医師による歯牙治療痕検査



遺族に扮する警察官、遺体と対面

オープン

Open Campus

キャンパス

医学科

8月9日の午後、大塚講堂にて医学科オープンキャンパスが開催されました。高校生258名（徳島県148名、四国他県29名、近畿52名など）と保護者171名にご参加いただきました。苛原医学部長、安友医学科長の挨拶の後、医学科の紹介、二つのミニ講義が行われました。ミニ講義では疾患病理学分野の常山幸一教授と血液・内分泌代謝内科学分野の安倍正博教授より、それぞれ基礎・臨床の立場から医師になるためにどのような素養が求められるか、その上でお二人のご専門の領域について高校生たちにわかりやす



く、興味深いご講義がありました。参加者は非常に熱心に耳を傾けていました。その後、高校生は26グループに分かれ、医学科生のエスコートにより、次世代酵素学研究領域、プロテオゲノム研究領域、先端医療研究部門、医療教育開発センター、医学科の各研究室（基礎系8・臨床系14）の施設見学を行いました。保護者には、総合教育センターアドミッション部門の植野部門長により入試説明会が行われました。その後、今回初めての試みとして、保護者の方々も3つのグループに分かれて、スキルラボ、外来診療棟1階ホスピタルストリート、西病棟1階待合ホールを見学していただきました。麻酔科では、手術部医局に高校生たちに来てもらい、手術室の全部屋モニターや術中麻酔記録画面などの見学を行いました。その後、気道確保の必要性、手技の説明を行い、トレーニング用の人形に、最新のビデオ喉頭鏡を用いて実際に挿管をしてもらいました。半日だけの開催でしたが、この体験で徳島大学医学科にぜひ入学したいと感じて、今後の学習意欲が向上すればありがたいです。今回の参加者の一人でも多くの方が医学科に入学してくれることを期待します。

（入試委員長（麻酔・疼痛治療医学分野 教授） 田中克哉）

医科栄養学

平成28年8月4日午前に医科栄養学科のオープンキャンパスを開催いたしました。大塚講堂大ホールにて、二川健学科長による医科栄養学科紹介、平成29年度入学者選抜の概要、入学者状況、栄養学科卒業生の就職状況および質疑応答（宮本（入試委員））、ミニ講義I「管理栄養士のお仕事紹介～可能性は無量大～」（安井苑子先生（生体栄養学分野））、ミニ講義II「医科栄養学科で学び・研究する醍醐味」（河合慶親先生（食品機能学分野））が行われました。当日は、全国から約500名の受験生および保護者の皆様にご参加いただきました。また、ミニ講義終了後には、総合教育センターアドミッション部門長の植野美彦先生に、同伴者向け入試説明会を開催していただき、父兄の皆様から多くの質問が出され、活発な質疑応答が行われました。オープンキャンパス開催については、本学ホームページ、高等学校教員、高等学校内のポスターおよび御家族からの情報が多く、充実した本学ホームページの成果が出ているように思います。参加者が印象に残った事項としては、ミニ講義における「管理

栄養士の仕事」や「食品研究開発の現状」、学科棟見学での研究紹介などが、集計したアンケートに記載されていました。特に学科棟見学では、



二川健 学科長による医科栄養学科紹介

受験生を対象に、医科栄養学科の8分野から、それぞれの研究内容を詳細に紹介していただきました。アンケートによると、臨床医学を基盤とした医科栄養学科の新しい教育内容が特に強く印象に残ったようです。今後も、ミニ講義などを一層充実させて、参加者の希望に応える努力が必要と考えます。

（医科栄養学科 入試委員（分子栄養学分野 教授） 宮本賢一）

保健学科

記録的な猛暑が続く中、8月10日（水曜日）午後に保健学科のオープンキャンパスは予定通り開催されました。この暑さにもかかわらず、看護学専攻178名（保護者77名）、放射線技術科学専攻94名（保護者81名）、検査技術科学専攻42名（保護者33名）とたくさん的高校生や保護者の方に参加していただき、徳島県内だけではなく、県外からも多くの参加がありました。大塚講堂での学科長の挨拶、入試委員長から入学試験の概要説明が行われた後、各専攻に分かれ、大塚講堂、保健学科棟、青藍講堂で専攻別説明が行われました。

それぞれの専攻で工夫を凝らして、施設見学、専攻別相談会、体験学習が行われました。看護学専攻では、体験学習に52名、病院見学に30名の高校生が参加し、体験実習では聴診、血圧測定、包帯実習、妊婦体験、おむつ交換などを体験してもらいました。病院見学では、新しく完成した外来診療棟を始め、大学病院で看護師さんが活躍している現場を見学してもらいました。参加できなかった高校生には、大学の施設や入学後

に学ぶ学習内容や実習風景を編集したDVDを見ていただき理解を深めてもらいました。さらに、保健学科の1年生から4年生の学生に参加してもらい、懇談会場で学生生活や受験勉強について相談を受け付けました。昨年からはじめた試みですが、大変盛況でした。他の専攻においてもそれぞれ工夫を凝らして専攻の特色をアピールし、高校生にとって将来学ぶべき内容や職業観について理解してもらい、有意義な半日を過ごすことができたと思います。これからも、高校生目線でのオープンキャンパスを目指したいと思います。



（保健学科 入試委員（生殖・更年期医療学分野 教授） 安井敏之）

# 医学教育分野別認証評価の概要について

医療教育学分野 教授 赤池 雅史

2010年9月に、ECFMG(Educational Commission for Foreign Medical Graduates)が、WFME(World Federation for Medical Education、世界医学教育連盟)の基準等の国際基準に認定されていない医学部卒業生のUSMLE(United States Medical Licensing Examination、米国医師国家試験)の受験を2023年から認めないと宣言しました。日本からのUSMLE受験者は毎年60名程度ですので、米国医師免許の取得希望者を除けば、ECFMGの宣言はわが国へ大きな影響を与えないように見えます。しかし、医療者や患者の国際移動、医療の国際化、医学教育の質保証の流れを受けて、わが国においても世界で活躍できる医師の養成が必要となっており、そこにECFMGの宣言が加わったことで、わが国の医学教育が国際基準を満たしているという評価を受ける気運が急速に高まりました。

2015年12月1日には、全国の医学部長を中心に、日本医師会、日本医学会連合、日本医学教育学会等の協力で、一般社団法人日本医学教育評価機構(Japan Accreditation Council for Medical Education; JACME)が発足しました。現在、トライアルとして実施されている認証評価は、2017年4月からはJACMEによる正式実施となります。2023年までにすべての医学部・医科大学が1回目の認証評価の完了を目指しており、徳島大学は2018年度を受審を目指して、その準備に着手しました。

認証評価では、WFMEグローバルスタンダードに準拠した医学教育分野別評価基準日本版に従って、受審する医学部の自己点検評価、5日間の実地調査を含めた評価委員による検証とフィードバックのステップが実施されます。この基準は、使命と学修成果、教育プログラム、学生の評価、学生、教員、教育資源、プログラム評価、統轄および管理運営、継続的改良から

なる9領域とその下位の36領域で構成され、各下位領域は、達成しなければならない基本的水準(“must”)と達成すべき水準(“should”)の2段階で設定されています。認証評価の受審においては、このような広範かつ詳細な水準設定のすべてについて、根拠となる情報の呈示、現状分析と自己評価、現状への対応、改善に向けた計画を自己点検評価書にまとめて呈示しなければなりません。さらに、実地調査では評価委員による授業・実習の視察や学生・研修医・教員との面談も行われます。

認証評価の受審にあたっては、現在の3年生から臨床医学科目の開始を3か月早めた新しいカリキュラムがスタートします。3年生の1月からPBLチュートリアル教育が開始され、4年生の11～12月頃に共用試験医学系CBTとOSCEを実施し、1月から診療参加型臨床実習(クリニカル・クラークシップ)が始まります。臨床実習では地域医療機関での学外実習を含め全体の期間を約2年間相当まで増加させ、その評価方法も充実させます。さらに、卒業時点で身につけておくべきアウトカムを設定し、何を教えたかではなく、学生が何を身につけたかを重視する学修成果基盤型教育への転換をはかります。また、カリキュラム評価にあたっては、成績評価方法の改善による教育成果の正確な把握とともに、授業評価アンケートの活用やカリキュラム委員会への学生の参加等、学生の意見を十分取り入れる仕組みも構築する予定です。

医学教育分野別認証評価では、教員、事務職員そして医学生が共通の認識のもとで一致団結して医学教育改革に取り組むことが求められます。この受審を通して、徳島大学の医学教育の質を飛躍的に向上させることを目指さなければならないと思います。

## 医学教育分野別認証評価のステップ

自己点検評価による内部質保証(受審医学部)



自己点検評価の検証(評価委員)



実地調査(評価委員)



フィードバック



受審大学医学部で継続的改良

## 医学教育分野別評価基準日本版 Ver. 2.1 世界医学教育連盟(WFME)グローバルスタンダード2015年版準拠

### 9領域 (AREA)

- |            |              |
|------------|--------------|
| 1. 使命と学修成果 | 6. 教育資源      |
| 2. 教育プログラム | 7. プログラム評価   |
| 3. 学生評価    | 8. 統轄および管理運営 |
| 4. 学生      | 9. 継続的改良     |
| 5. 教員      |              |



## 学生委員会から

医学部学生委員会委員長 鶴尾吉宏

医学部学生委員会は、10名の教授ならびに准教授の委員から成る委員会であり、医学科の基礎系から3名（鶴尾吉宏、坂下直実、米村重信）、医学科の臨床系から2名（西良浩一、橋本一郎）、医科栄養学科から2名（高橋章、濱田康弘）、保健学科から3名（奥田紀久子、阪間稔、濱野修一）の委員で構成されています。本年度は、委員長は鶴尾吉宏が、副委員長は坂下直実先生と奥田紀久子先生が担当しています。この組織は、医学部と大学院における学生生活に関わる諸事項を審議して学生の生活を支援しており、学生の修学指導はもちろん、学内外での課外活動を監督し、奨学金貸与の選考や、表彰や懲戒に関することなどの他に、身分異動、福利厚生、健康・保険や安全に関すること、進路、就職や留学、国際交流に関することなど学生生活に関係する多数の事柄を扱っています。

学生生活においては、休学願や復学願の提出を必要とする場合があります、その都度相談などに当たっておりますが、時々、学生証を紛失しましたので再発行をお願いしますと依頼してくる学生の対応をすることがあります。学生証は身分証明書であると同時に、学内のセキュリティ情報を入力しており、医学科の5年次からは臨床実習のために病棟を出入りするのに必須となります。紛失後に届けを出さない場合には、再発行できない事態も生じますので、学生証

の管理については各自が十分に注意して行うようにしてください。

また、蔵本構内における自転車の駐輪について、決められた場所にきちんと駐輪することが必ずしも守られていないことが、目に付きます。特に、体育館前と隣のテニスコート前の通路、および図書館の周囲の通路において、通路上に駐輪することによって歩行者の通行障害が生じています。心配なのは、この通行障害によって、二次的に交通事故が起こる危険性があることです。今のところ交通事故は生じておりませんが、自ら社会的なマナーを守るという普段の行動によって、交通事故の発生を未然に防ぐことができることを知って行動していただきたいと思っております。規則を守り、良いマナーで行動することは学生生活を送るのには必要なことです。医療関係者として社会で仕事を行う使命を受けた者であることを自覚して、大学内はもとより学外においても、正しい倫理観と道徳心を持って常に行動できるように心がけていただきたいと思っております。

学生生活は、自主・自立が基本であり、学生には自己責任が問われます。しかし、学生生活で困った時には、学生委員の先生方や医学部学務課の学生係に気軽に相談してもらえれば、よい解決策が見つかるように協力いたしますので、その場合には是非ご相談してください。

## 教務委員会から

医学部教務委員会委員長 西村明儒

徳島大学では、学長が交代するとともに生物資源産業学部が新設されたことが、世間の耳目を集めておりますが、教務委員会としては、共通教育センターの教養教育院への改組に注目したいと思っております。これに伴い、教養教育は、専門教育の基礎となる、いわゆる汎用的技能教育も含んだものと再定義されるようになっていきます。医療系の学部でも、医療人を育成するカリキュラムにおける教養教育とは何かを定義し直し、まずは、医療専門教育の基礎となるべき、論理的な文章のアカデミック・ライティング、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力と言った汎用的技能を医療基盤教育と位置づけて展開したいと考えております。それとともに自然科学系科目についても解剖、生理、病態の理解に資する内容にしていきたいと考えております。もちろん、直ちに理想的なカリキュラムを構築することは容易ではありません。試行錯誤を繰り返し、学生諸君の意見を取り入れながら、より良いものにしていきたいと思っております。

この背景には、臨床実習が従来よりも前倒しになってきていることと、CBTとOSCEの試験に合格して、Student Doctorの資格を得てから臨床実習に臨むことが求められていることがあると思われまます。CBTはコンピューター

の画面に出される問題に解答する形式の試験で臨床実習に臨むための知識が問われます。OSCEは、基本的な診療技能が身につけているかを評価する試験です。いずれも外部評価者の監視の下、国家試験に準ずる形で行われます。このため、学生は、従来よりも短い期間で専門科目を修得しなければなりません。それに加えて、高校教育では、理科を2科目しか履修できないカリキュラムになってしまっており、多くの学生が、入学試験に必要な物理・化学か化学・生物という選択をしており、生物や物理を高校で全く勉強せずに入学しています。中学の知識の上に大学の内容を積み上げるのは、厳しいものがあると思われまます。教養教育では、このギャップを埋めるべく、高校の復習となるリメディアル教材をe-learningで提供し、講義も開講しております。基礎学力を固めるためにこれらを利用してもらえればと思っております。

教養教育には、汎用的技能の修得や医療教育の基盤固めの意味合いもありますが、本来は、人間性の涵養が重視されるべきと思われまます。医療は、人を相手にする仕事ですから、自然科学は、言うまでもなく、社会科学、文学、芸術、社会情勢などにも興味を持って学んで欲しいものです。

# 徳島医学会報告

## ■ 第253回徳島医学会学術集会（平成28年度夏期）

顕微解剖学分野 教授 鶴尾吉宏

第253回徳島医学会学術集会は、平成28年7月24日(日)に、本年4月に新築された徳島県医師会館で開催された。最近3年間は、本学術集会は、大学内の大塚講堂あるいは長井記念ホールにおいて年2回開催されていたが、今回から、徳島県医師会館が新しく建築されたことに伴い、夏の学術集会は、徳島県医師会館にて開催することになり、本大会はその第1回目という記念すべき大会であった。徳島県医師会館での開催は、4年ぶりであるが、会場は、徳島県医師会館の4階にあり、メイン会場となるホール、ならびにポスター発表の会場は、徳島県の木材が基調として使われ、落ち着いた雰囲気と居心地が良く、設備も整備された立派な施設であった。今大会の大学側の担当は、顕微解剖学分野教授の鶴尾吉宏と総合診療医学分野の谷憲治特任教授が務めた。

顕微解剖学分野の鶴尾吉宏の開会挨拶に続き、3名の教授による教授就任記念講演がA会場のホールで行われた。最初に、看護技術学分野のLocsin Rozzano de Castro教授による「The technological encounter within the universal technological domain: technological competency as expression of caring in nursing」、次に、臨床食管理学分野の竹谷豊教授による「慢性腎臓病におけるリン代謝異常と食事管理」、最後に、形成外科学分野の橋本一郎教授による「形成外科組織移植術の過去・未来・現在、そして未来へ」の講演が行われた。引き続き、隣接するB会場（研修室B・C）とC会場（学習室）において、一般および若手のポスターセッションが各々行われ、総計33演題の研究成果が発表され、質疑・討論が活発に行われた。

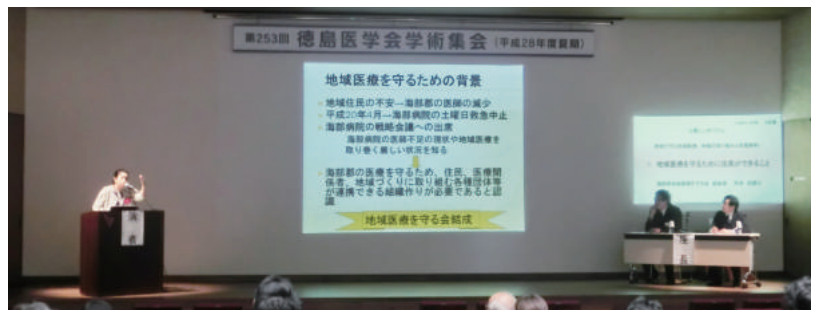
午後からは、A会場のホールにおいて、青原稔徳島医学会会長と斉藤義郎徳島県医師会会長の挨拶の後、前大会で選出された第36回徳島医学会賞および第15回若手奨励賞の授与式が行われた。徳島医学会賞は、大学側は腎臓内科（検査部）の岸誠司先生に、医師会側は徳島市民病院がんセンターの蟻井岐美先生に授与され、若手奨励賞は、卒後臨床研修センターの布村俊幸先生と、同所属の中島大生先生に授与された。受賞記念講演として、岸先生による「新規細胞エネルギー代謝スクリーニングに基づいた急性腎障害予防薬/治療薬の探索と開発」、蟻井先生による「あんしんカードを用いたがん患者の救急医療体制の構築と病病・病診連携の試み」の講演が行われた。

公開シンポジウム「地域で守る地域医療ー地域

の取り組みと支援体制ー」では、4名のシンポジストによる講演が行われた。地域の側から、石本知恵子氏（海部郡地域医療を守る会副会長）による「地域医療を守るために住民にできること」、瀬川正昭先生（NPO法人山の薬剤師たち、徳島文理大学薬学部）による「こやだいら薬局の地域を守る取り組み」の講演に続き、大学側から、谷憲治特任教授（総合診療医学分野）による「徳島大学における地域医療に貢献する医師の育成」、行政の側から、鎌村好孝先生（徳島県保健福祉部）による「地域医療構想、地域包括ケアの実現に向けてー住み慣れた地域で暮らしたいー」の講演が行われた。地域、大学、行政の立場から行っている徳島県内での地域医療への取り組みと支援体制について、現状の理解が深まり多くの示唆が得られた貴重な講演内容であった。

最後に、今回のポスターセッションの中から選考された第37回徳島医学会賞および第16回若手奨励賞の選考結果の発表が、徳島県医師会の大塚明廣先生から発表され、徳島医学会賞には、大学側は消化器・移植外科の高須千絵先生の演題、医師会側は徳島市医師会の岡部達彦先生の演題が選ばれ、若手奨励賞には、卒後臨床研修センターの村上貴寛先生と蔭山彩人先生の演題が選ばれた。その後、閉会の挨拶が総合診療医学分野の谷憲治特任教授によって行われ、盛況のうちに閉会した。

本学術集会の開催にあたり、徳島県医師会、徳島医学会事務局およびご参加・ご協力いただいた関係各位の皆様へ、心より感謝申し上げます。



### ◆◆ 各賞受賞者 ◆◆

■ 第253回徳島医学会学術集会(平成28年7月24日)において、第37回徳島医学会賞及び第16回若手奨励賞の受賞者が選考されました。

## 第37回徳島医学会賞

**高須 千絵** (徳島大学病院消化器・移植外科)  
「転写因子制御による肝虚血再灌流障害の新たな治療法の開発」  
**岡部 達彦** (徳島市医師会)  
「徳島市医師会が運営する徳島市地域包括支援センターの取り組み」

## 第16回若手奨励賞

**村上 貴寛** (徳島大学病院卒後臨床研修センター)  
「原発性アルドステロン症の診断に有用な臨床所見の検討」  
**蔭山 彩人** (徳島大学病院卒後臨床研修センター)  
「徳島大学病院における院内発症脳卒中症例の検討」

## 平成28年度 臨床実習後OSCE成績優秀者

平成28年7月2日、臨床実習クリニカルクラークシップの総仕上げとして、6年生を対象とした臨床実習後OSCEを実施しました。成績が特に優秀であった学生には、西村教務委員長より表彰状が授与されました。このような臨床技能試験を通して、臨床能力の向上が期待されます。

**最優秀賞** 坂東美咲

**優秀賞** 岡本雄太郎、澤田好江、西田結香、堀太貴、松下知樹、  
武原悠花子、四宮遼、辻本賀美、西晃

**部門賞(概略評価部門)** 平尾麻衣子、松井恒樹、川田知代、谷村奈津美

**部門賞(評点評価部門)** 工藤千晶、宮本亮太、住田智志、高橋未奈



## 白衣授与・Student Doctor 認定証授与式

医療教育学分野 教授 赤池雅史



平成28年3月11日、長井記念ホールにて、保護者の皆様のご列席のもと、医学科4年生を対象に、白衣授与・Student Doctor 認定証授与式が行われました。第一部では苛原稔医学部長、安井夏生病院長からのご挨拶と実習生代表宣誓の後、学生ひとりずつに徳島大学病院のエンブレムが肩に刺繍された白衣とStudent Doctor 認定証が授与されました。第二部ではキャリア形成教育として、石本寛子先生（徳島県危機管理部副部長）、常山幸一先生（徳島大学大学院医歯薬学研究部疾患病理学分野教授）、矢田圭吾先生（徳島大学病院小児外科・小児内視鏡外科助教）、三橋惇志君（徳島大学医学部医学科6年生、MD-PhDコース）、森岡久尚先生（環境省原子力規制委員会原子力規制庁長官官房放射線対策・保障措置課企画官）の5名の方々のご講演が行われました。

全国医学部長病院長会議では、臨床実習前教育で所定の成績を修め、共用試験医学系CBT（computer-based testing）とOSCE（Objective Structured Clinical Examination；客観的臨床能力試験）に合格した医学生をStudent Doctorに認定しています。Student Doctor認定を受けた学生は、患者さんの同意と指導医による指導監督のもとで診療チームの一員としての



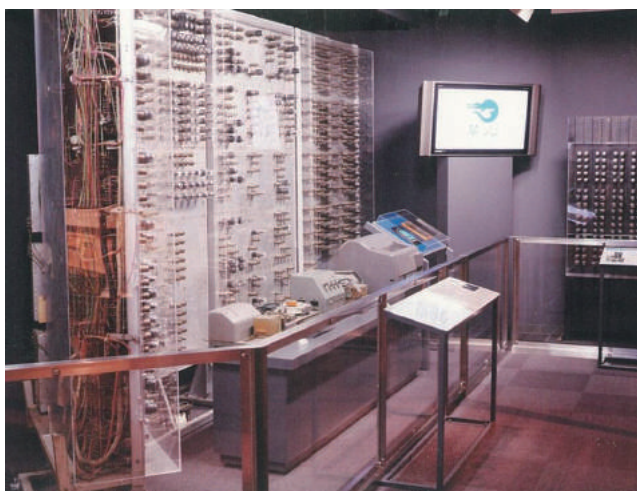
役割を果たしながら、クリニカル・クラークシップ（診療参加型臨床実習）を履修します。Student Doctor認定制度は、医学生に医療現場で実習を行う心構えと自覚と持たせるとともに、臨床実習学生が必要とされる知識・技能・態度を有していることを社会や患者さんに示すことで、臨床実習へのご理解とご協力をお願いすることを目的としています。Student Doctorに認定された医学生が、優れた医師に成長していくことを期待したいと思います。

## 学遊抄

## 真空管式計算機から人工知能へ

医用画像情報科学分野 教授 近藤 正

今から約40年ほど昔になりますが、私が大阪大学大学院工学研究科に進学した時の話をします。当時は1975年頃ですのでパソコンやインターネットなどはまだ存在していません。私は、最先端の装置である電子計算機にあこがれて、大学院では精密工学専攻の計算機制御講座に入りました。研究室に初めて行くと、大変広い部屋でしたが、半分ほどのスペースに見たことがない装置が保管されていました。先輩の院生に聞くと真空管式計算機ということでした。これは、当時の牧之内教授（現、大阪大学名誉教授）が若い時に計算機の研究のため開発したものでした。この計算機は動いていませんでしたが、大学院の5年間この計算機と同じ研究室で過ごしました。この真空管式計算機は、現在、大阪大学博物館に展示されています（写真）。また当時、計算機の入力はパンチカードや紙テープが使われていたので、大きな音がするカード穿孔機が2台研究室にありました。歯車式計算機も置いてあったのを覚えています。マイクロコンピュータはすでに発明されていて電子基板でできたボードコンピュータが研究室にあったのを覚えています。研究の方は、当時の田村助教授（現、大阪大学名誉教授、関西大学名誉教授）が、米国のスタンフォード大学の留学から帰られて、当時最先端の学問であったシステム工学の研究を行っていたの



で、システム工学を研究対象にすることができました。情報科学という言葉はまだ存在していませんでした。この40年間で、コンピュータは飛躍的な進化を成し遂げました。今、学生時代を思い出すと、時間がゆっくりと過ぎて研究に没頭できて、私にとっては充実した本当に良き時代だったと思います。

ここで、徳島大学での研究についても話させていただきます。研究テーマは、「人工知能理論を用いたコンピュータ支援診断（CAD）システムの研究」です。私は、1988年に徳島大学に赴任しましたので、それから始めた研究です。内容は新しい人工知能理論（GMDH type neural network）を提案してコンピュータ支援診断に応用することです。この研究で、今までに国際会議発表論文も含めて160本の英語論文を書くことができました。また最近、2つの国際会議でBest paper awardを受賞しました。この人工知能理論も年々研究者人口が増えて、Google Scholarなどの学術データベースで「GMDH type neural network」を検索すると、関連した数千本の論文がヒットするようになりました。

話が変わりますが、現在Google, Facebook, Apple, BaiduなどのIT企業を中心に世界的に人工知能の開発競争が始まっています。今、世界的に注目されている人工知能理論は、「ディープラーニング」という数学理論です。私の現在の研究目標は、「ディープラーニング」よりも優れた数学理論を開発して医学応用することです。定年間際ですが、提案したGMDH type neural network理論をさらに進化させた新しいタイプの人工知能理論（生物の進化過程を模擬して複雑な構造をした神経回路網（Deep neural network）をコンピュータの内部に自動的に自己組織化する数学理論）の研究開発とその医学応用（コンピュータが内部に生成した人工神経回路網を用いて、人間と同じように、いろいろな臓器の3次元像を認識したり、肝臓癌や肺癌などの画像診断を行う）研究を続けています。

今から40年経つと、人工知能がどれぐらい進化するのか、また、人工知能により医療分野がどのように変化するのかということは、私にとって大変興味深いテーマです。

## 学遊抄

## ホルター心電図研究の出発点

生体機能解析学分野 教授 齋藤 憲

退職まであと1年を切った時期に学遊抄の原稿依頼を戴いた。私は徳島大学入学以来、香川県立白鳥病院で勤務した2年6カ月を除いてずっと徳島大学でお世話になっている。同期生であった人体病理学分野の佐野名誉教授も数年前にお亡くなりになり、だれも同級生はいなくなった。さみしい限りである。

私が大学に入学したのは昭和45年で、大学紛争の名残りが残っており、大学の構内にも立て看板などが無造作に並べてあり、静かに勉学にいそむ様な環境にはなかった。一般教養の授業は熱心な先生方もいたが、医学の勉強とは程遠く、現在のSIHプログラムのようなシステムもなかったため、ただ毎日が無為に過ぎて行ったような思い出しか残っていない。

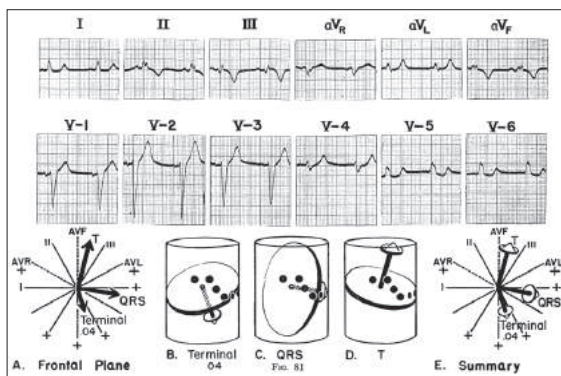
医学の勉強に興味をわき始めたのは、専門課程に入ってからである。徳島大学には当時、全国でも珍しい酵素学研究所があ

り、糖代謝や脂質代謝、核酸や蛋白質合成の仕組みなど現在の分子生物学に繋がる最新の生化学の講義が聴けたのは現在の遺伝性不整脈の理解にも大いに役立っている。また、当時は参考書などもあまりなかったが、分かりやすい授業が多く、授業ノートが後の国家試験の資料としても大いに役立った。やはり、大事な事はパソコンより自分の手で書いた方が覚えやすいのではないかと今でも思う。

現在、私は昼間は保健学科で学部生の教育・実習を、夕方から夜は保健科学教育部で大学院生の研究指導を行うと共に、空いた時間で徳島大学病院のホルター心電図の解析をしており、蓄積されたDatabaseは現在12,000件余りとなっている。ホルター心電図の解析は、全くのボランティアであるが、これは学生時代に、教授自ら多忙な時間を割いて、熱心に心電図を教え

て戴いた当時、第二内科教授であった森博愛先生と徳島大学への感謝の気持ちである。学生時代の写真は1枚も残っていないが、家探しをしていると、30年以上も前にテキストに使

たHurstの心電図と当時、大事にしていたモンブランの万年筆で書いた自筆の学習メモが出てきたので添付する。



Date \_\_\_\_\_ No. \_\_\_\_\_  
 OSR  
 LAD  
 CLBBB (QRS 0.13 sec)  
 inferior infarction  
 The terminal aVR vector is directed to the left, downward and posteriorly, indicating LBBB. The QRS-T axis is in an abnormal position. The vector sum of the mean AVR and T vectors (the ventricular gradient) would point cephalad. This is, of course, an abnormal direction for the ventricular gradient and means that the T vector is pointing away from the diaphragmatic region of the left ventricle and hence the ECG is strongly suggestive of diaphragmatic infarct.

# 1 2 3 数字で見る医学部 7 8 9

## ◆ 入学試験 (医学・栄養・保健)

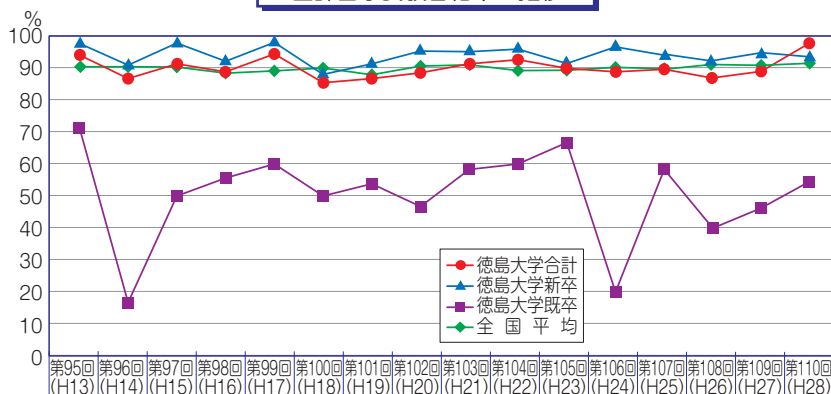
平成 28 年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数・入学者数調

	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	海外	現役	一浪	その他
医 学 科	114	296	223	※ 115	114	75	39	31	83	0	46	43	25
医 科 栄 養 学 科	50	191	146	54	50	7	43	9	41	0	46	4	0
保 健 学 科	看 護	70	303	204	77	4	67	36	35	0	64	3	4
	放 射	37	169	129	43	31	9	6	34	0	30	8	2
	検 査	17	96	89	20	7	10	7	10	0	15	2	0

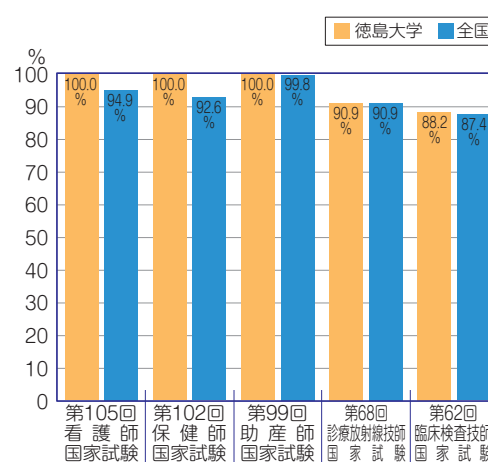
※入学手続き後、入学辞退者 1 名があったため追加合格者 1 名を出したことにより、合格者が 115 名となった。

## ◆ 国家試験

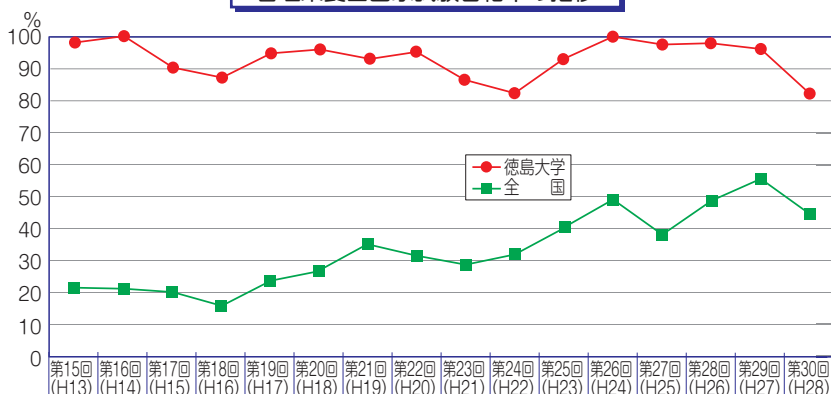
医師国家試験合格率の推移



保健学科 各種国家試験合格状況について



管理栄養士国家試験合格率の推移



## ◆ 科研費採択状況 (医学部・病院の合計)

(平成 28 年 7 月 1 日現在)

研究種目名	平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度		平成 28 年度	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
特定領域研究	1	4,800	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究 A	0	0	0	0	0	0	1	8,200	1	11,700	1	11,700
基盤研究 B	19	78,900	18	80,700	16	68,200	19	74,600	16	65,000	19	68,700
基盤研究 C	87	108,800	90	109,200	96	113,100	92	111,700	97	120,400	103	125,600
挑戦的萌芽研究	23	32,800	25	31,400	22	27,800	16	21,200	17	22,600	21	25,500
若手研究 (S)	1	14,400	1	12,800								
若手研究 (A)	3	19,500	3	11,500	1	5,400	3	20,300	3	14,700	4	31,600
若手研究 (B)	51	66,600	50	77,100	56	79,500	44	57,500	53	74,400	57	73,800
研究活動スタート支援	2	2,600	8	9,500	7	7,700	7	7,500	8	8,600	4	4,300
新学術領域研究	6	42,400	6	43,900	5	19,500	4	14,200	1	10,900	2	14,900
特別研究促進費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特別研究員奨励費	4	2,800	3	2,700	2	1,800	2	1,900	2	1,700	4	3,400
合計	197	373,600	204	378,800	205	323,000	188	317,100	198	330,000	215	359,500

※若手研究 (S) については、平成 22 年度より新規募集は行われていない。

## 新任教職員あいさつ

蔵本事務部長 秋山靖夫



本年 4 月に、病院事務部次長兼経営企画課長から、蔵本事務部長に異動してまいりました。

病院在職中には、新外来診療棟開院に伴い医学部の先生方、学生の皆様に大変ご迷惑をおかけするとともに、ご協力い

ただきありがとうございました。

蔵本事務部は、今年 4 月から事務組織の改編により、医学部総務課、医学部学務課、歯学部事務課、薬学部事務課、会計課の 5 課体制となりました。私は、まとめ役として部長業務に専念していますが、業務が教育・研究・管理運営と幅広く、戸惑っています。しかし、各課長、各職員のサポートのおかげで業務

を進められています。

このように、周りの皆様に支えられ今まで業務を行うことができています。私は、いつも「感謝」という言葉を忘れないように心がけています。

何かを成し遂げるには、自分一人の力では成し遂げることができません。理解者、協力者などがいて成し遂げられるものだと思います。私はいつも周りの皆様に「感謝」の気持ちを持ち接しています。これからも、「感謝」の気持ちを持ち、蔵本事務部の部長として教員、学生から信頼され、迅速な事務処理ができる組織作りに努めてまいりますので、よろしく願っています。

私の部屋はいつもオープンです。いつでもお立ち寄りください。

## 第68回 西日本 医科学生 総合体育大会

ゴルフ部  
(男子)  
優勝



徳島大学は、学校教育法第 109 条第 2 項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準を満たしている」と認定されました。

(平成 26 年 3 月 26 日)

## ● 認定評価機関

独立行政法人大学評価・学位授与機構

## ● 認証期間 7 年間

(平成 26 年 4 月 1 日～平成 33 年 3 月 31 日)

## 編集 後記



この医学部だよりが発行される頃は、熊本の暑さもやわらいでいることを願っています。これでもか、これでもかと災害が続きます。予想をあげ笑うように思いもかけぬ所で地震が発生し、熊本地震は大変驚きました。来るべき南海トラフ地震に備えて、今回は法医学の西村明儒教授に「医療機関として備えるべき課題について」ご執筆頂きました。南海トラフ地震が近づくにつれ、徳島県、徳島大学の地盤沈下も進んでいます。そういえば、眉山を走っていると、以前は見かけなかったイノシシ、タヌキ、ハクビシンに遭遇します。人口減少と地域の崩壊が進んでいる結果でしょうか？眉山の車道もイノシシが出てこないように「ワオー、ワオー、ヒイー、ヒイー」と大声をあげて走らなくては行けない時代になりました。ゴテゴテのローカル大学一直線の大学にいても、少なくとも医学部は、全国から大勢の若者が集まるような魅力ある学部でありたいと願っています。(六反一仁)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会  
広報委員 六反一仁(委員長)、赤池雅史、西村匡司、高山哲治、酒井 徹、大塚秀樹、秋山靖夫

本誌へのご意見・ご要望は、(総務係) E-mail: [isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp](mailto:isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp) までお願いします。  
なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel: 088-633-9116 Fax: 088-633-9028 URL <http://www.tokushima-u.ac.jp/med/>